の行脚姿の写眞を見ても、それを感ぜしめられる。
窮みなき法悦にうるんでいる瞳、ほほの輝き、何れからともなく感ぜしめられる清純さ、健かさ、美しさ私は君を思うとき、それが瞼にくつきり浮ぶ。
私は禮仰しつつ、心香をささげている。

桑山君の姿に憶ふ

文學部長・教授　岩井大慧

二十八年の春、私は法事があつて函館に渡りました。ところがどういふ廻り合せか、往きも復りも洞爺丸に乘つたのでした。それで今度の惨事が傳へられると、何といふことなしに、異狀な關心をもち「あの船がね！」と吃驚すると同時に、何とも言へぬいやな氣持がしました。その一方船そのものについて言ひ知れぬ愛惜の念が起り、そして誰も知人の乘つてゐないことを祈つたのでした。ところが事もあらうに、その遭難者中に、その二十八年の卒業生で、而も私ども史學科生だつた桑山君が、颱風の犧牲となつてゐたと聞いて、再び呆然として了ひました。何といふ惡い廻り合せであつたのでせう。靜かに眼をつむつて冥福を祈ると、私の腦裡に洞爺丸のあちこちの場所が浮び、そしてそこに桑山君の青く剃つた頭の姿が現はれて來ました。私はここに拙い一首を君の靈に捧げることにしました。

北海の渡島（ワシマ）のみなみ七飯（ナナエ）濱
われ泣きくれて君をしぞ憶ふ

あした來る人

文學部教授　佐藤堅司

洞爺丸の遭難者のなかに、桑山君の名を見出したとき、私の胸はつぶれた。そうして、その悲しみのためにふさがる瞼のなかに浮んだのは、在りし日の桑山君の面影である。駒澤大學での桑山君と私との交渉は僅かに一年間だつたが、二人は性格的にウマがあつたとでもいうのか、研究室や圖書館や見學旅行やいろいろな機會に、よく問答しあつたものである。桑山君は私に隨分多くの質問をした。その全部をいま私は覺えているわけではないが、不思議にも忘れられない問答が三つ四つある。研究室での一遍上人論と妙好人論、圖書館の一隅での傳授に關する問答、鎌倉での神社建築に關する問答がそれである。
私は桑山君の性格を井上靖氏の『あした來る人』（朝日新聞掲載）と結びつけてみた。この小説は、「ウマがあうかあわないか。」を主題としていたからである。その主人公は、男女四人で、いずれも好感のもてる人物なのだ。彼等は「みんな缺点はあるが、……純粋なものがある。その純粋なもののために、みんな傷ついたり回り道をしたりしている。……併し、やがて、彼等は完全な人間として、あした來るだろう。」と、作者から評されている。桑山君も、「あした來る人」の部類に屬する人だつた。然るにその桑山君は、「あした來ぬ人」になつてしまつた。まことに悲しいことである。
函館の海に沈みてわが友はあした來まさぬ人となりけり
悲しやなこれを運命（さだめ）といふべきかひとり身にしてゆける君はも